

金子 熊夫

かねこ・くまお二外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EIEE会議代表、元外交官、元外務省原子力課長、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。kaneko@eeecom.org



教授が、珍妙な実験装置を作ったそう
だ。
人の排泄物を含む汚下水を2、3度

今から四半世紀ほど前、ドイツ・ハイデルベルクの近くのタウムシュタット工科大学の主催で、核・原子力問題に関する国際専門家会議が開催された。日本からの参加者は筆者と故高木仁三郎氏の2人だけで、筆者は退官直後、大学人という気楽な立場であった。
会議中のある晩、近くの古城レストランで夕食があった。小高い山の上で、月光の下、篝火を囲み、ワインを飲みながらの談論風発、楽しいひと時であった。席上、ある話題に関連して、ドイツ人学者が面白い話を披露した。昔タウムシュタット工科大学理工学部の

時評

ウエーバ

2015.1.6

理性と感性 究極の判別法

もフィルターで濾過し、さらに煮沸、蒸留し、完全に滅菌し無臭にした後、カルシウム、マグネシウムなどの鉄分を適量加え、摂氏5度程度に冷やし、最もおいしく飲めるような状態でグラスに注ぎ、さあどうぞ差し出す。エヴィアの天然水に劣らない、いやもつと美味だ。

ところが、この実験を見学して一部の見学者は飲んだが、大部分の人は尻込みしたそう。
話ほそれだけで、次にこの実験が何を意味するかに議論が移った。当然のように、意見は二つに分かれた。高木さんがどういう意見を述べたか忘れたが(ただニヤニヤ笑って議論を聞いていただけと記憶している)、筆者は、安全で美味であることが科学的に確認

された。右の実験に即して言えば、一流大学の責任ある科学者が管理している装置(完全に可視化)であるから、信用できると思う人は飲むが、やはり何となくいやだ、気持ちが悪いや言ってしまう。何となくいやだ、絶対の孤島で、他に飲む水が全くない場合には渋々飲むだろうが。

実験するわけにはいかないから、専門家の判断を受け入れる以外にない。問題は、その専門家が「本当に信用できるかどうか」だ。
ここまで書いて来れば、もう付言するまでもなく、これは原子力発電に対する人々の態度にも当てはまるだろう。理屈でなく、何となく怖い、不気味、危険だからいやだという人を説得するのは不可能に近い。確信的、イデオロギ

いた一般市民は中々飲もうとしない。それもそのはず、この浄化装置は全部ガラス張り、外から見えるようになっており、最初の工程で、人糞が混じった汚水が流れるところが丸見え。だから、いくら100%安全でおいしい水だと言われても飲む気になれない。実験に参加した科学者がおいしそうに飲んでいるところをみて、漸く

ええるようになっており、最初の工程で、人糞が混じった汚水が流れるところが丸見え。だから、いくら100%安全でおいしい水だと言われても飲む気になれない。実験に参加した科学者がおいしそうに飲んでいるところをみて、漸く

頭では、つまり理性では理解できても、感覚的に「何となくいや」というところがポイントだ。個々人の感覚の問題だからどうしようもない。いくら詳しく懇切丁寧に説明しても効き目はない。
あるいは、責任ある専門家(科学者)が大丈夫だと言うからそれを信用するかどうかの問題だ。一般市民(素人)は自分でいちいち

活路は拓かれる。
必要をいくら説いても、納得してもらおうのは至難の業だ。筆者などは、最近つくづく二項対立的な原論論議に辟易している。これは、国のために正しいと確信したら、漠然とした「世論」や「民意」に左右されず断固正攻法で行く以外にない。3.11は忘れるべからず。だが、それを克服してこそ日本の